

令和元年6月25日現在

機関番号：32608

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07079

研究課題名(和文)北米植民地の環境史におけるイギリス帝国の役割

研究課題名(英文)The British Empire in the Environmental History of the American Colonies

研究代表者

鰐淵 秀一(Wanibuchi, Shuichi)

共立女子大学・国際学部・専任講師

研究者番号：30803829

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は北米植民地の環境史におけるイギリス帝国の役割を帝国のポリティカル・エコノミーという観点から明らかにすることを目的としている。本研究期間中に発表した主な成果として、ペンシルヴァニア植民地の創設者ウィリアム・ペンの植民構想と帝国イデオロギーについての英語論文および三本の書評論文を出版した。また、日本アメリカ史学会例会「初期アメリカ史研究の新潮流」における報告をはじめとする学会発表を行なった。また、アメリカ合衆国の各研究図書館、文書館における複数回の調査旅行を実施し、一次史料及び二次文献の調査を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、近年英米で進展した近世イギリス帝国のポリティカル・エコノミーの視点を取り入れることによって、北米植民地の環境史研究における植民者の自然環境への態度をめぐる議論を、イギリス帝国の役割という観点から捉え直すことにある。イギリス帝国を環境に働きかける主体として認めることにより、スペイン領やフランス領と比較してイギリス領北米植民地の環境史の展開の普遍性と特殊性を明らかにできると共に、北米植民地の環境史をイギリス帝国環境史やグローバル環境史の研究成果に接続させることも可能となる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project is to investigate the role of the British empire in the environmental history of the American colonies in terms of the political economy of empire. During the term, I published an article about the idea of colonization and imperial ideology of William Penn, the founder of the Pennsylvania Colony, written in English, and three book reviews on early American history. I also read papers at several conferences, including the paper for the panel "the new current of early American history" at the 43rd meeting of the Japanese Association for American History. Also, I conducted research trips investigating manuscripts and other materials at research libraries and archives in the United States during summer and spring recesses.

研究分野：アメリカ史

キーワード：環境史 北米植民地 イギリス帝国 ポリティカル・エコノミー 西洋史 アメリカ史 植民

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近世のヨーロッパによる南北アメリカの植民地化は、先住民の服属や排除と並行して、自然環境の大規模な改変を伴って進行した。1970年代に合衆国の学界に登場した環境史研究は、この過程を植民者による英雄的なフロンティア開拓の物語としてではなく、家畜の導入や帰化植物の役割等に注目して生態系全般の変容のプロセスとして提示した。W・クロノンはこの手法を北米植民地史に導入し、当該分野のスタンダードを確立した。彼は、ニューイングランドを舞台に先住民と植民者の自然環境に対する態度を比較し、入植地域における生態系の変容の主な原因を、自然環境を搾取可能な商品とみなす入植者の資本主義的心性に求めた。

北米の植民地化における資本主義と自然環境の関係については、クロノンが提起した資本主義的植民者像をめぐる議論が展開してきた。クロノン=テーゼに対し、同地域の環境史を扱った後続の研究者は正反対の見解を示した。彼らによれば、植民者は自給自足の前資本主義段階にあっただけでなく、あるタウンでは農民たちは自然資源を維持する「持続可能な」農業を行っていた。他方、南部プランテーション植民地についての研究は、プランターの資源搾取的な企業家的性格を強調する傾向にあり、資本主義的植民者像を支持している。また、近年のK・ポメラッツによる「大分岐」論は、18世紀の西欧、とりわけイギリス産業革命の要因を、自国の石炭資源とともに北米植民地の自然資源の存在に帰することで、グローバル経済史の視点から新大陸の自然環境への資本主義的介入があったことを示唆している。

しかし他方で、既存の環境史研究は植民地化を推進した主体であるイギリス帝国それ自体の役割には着目してこなかった。近世イギリス帝国のポリティカル・エコノミーに関する近年の議論が示唆するように、帝国は自らの国家理性に基づき、後に重商主義と総称される商工業の発展や植民地の拡大についての国家運営のビジョンを有していた。このようなイギリスの植民政策が北米大陸の自然環境や植民者の環境への態度にどのような影響を与えたのかを明らかにするため、北米植民地の環境史におけるイギリス帝国の役割を検討課題とすることにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近世北米大陸の環境史におけるイギリス帝国の役割について、帝国のポリティカル・エコノミーという観点を導入することによって検討することにある。既存の研究では、イギリス領北米植民地における生態系の変容の主要因について、入植者の資本主義的心性をめぐって議論が進められてきた。それに対して、本研究は、入植者の背後に存在した帝国という枠組がどのように植民地の環境変化に影響を及ぼしたのかという観点から考察する。北米大陸の入植や資源開発についてのイギリス帝国のイデオロギーと人的ネットワークの分析を通じて、植民者の自然環境への態度を方向づけた政治経済的条件を明らかにする。

3. 研究の方法

17-18世紀のイギリス帝国のポリティカル・エコノミーを、(1)「改良」に基づく農本主義を始めとする、北米植民地の土地や資源の開発についてのイデオロギー、(2)個々の政策や法令の制定や実行に関与した改良家や科学者の人的ネットワークという要素に還元した上で、個々の要素の分析を行い、それぞれの要素について、時間的変化に沿って、その内容や特質を明らかにする。

4. 研究成果

本研究期間に得られた研究成果について、論文発表、口頭報告、海外での調査に分けて報告する。

まず、1682年に北米中部大西洋岸地域にペンシルヴァニア植民地を建設したクエーカー教徒ウィリアム・ペンの植民構想に関する分析を英語論文にまとめ、ペンの思想や活動を多角的に検討した論文集 *The Worlds of William Penn* (Andrew R. Murphy and John Smolenski, eds., New Brunswick: Rutgers University Press, 2019)に発表した。“William Penn’s Imperial Landscape: Improvement, Political Economy, and Colonial Agriculture in the Pennsylvania Project”と題した本論文では、ペンの植民に関する言説を16世紀後半から17世紀中葉にかけてのイングランドにおいて展開されたアイルランドや北アメリカの植民に関する言説を継承するものとして捉えるとともに、ペンが活動した王政復古期の政治経済学の議論や自然哲学の方法を踏まえたものであったことを明らかにした。結論として、以下の二点を強調した。第一に、ペンの植民構想は植民地の直轄化や航海法の改正等の王政復古期のイングランド政府による植民地統制政策と親和的であり、経済的にも本国経済に貢献することが目的とされていた。第二に、ペンが植民地で推奨していた産業はワイン醸造等のイングランドにおける輸入代替を目的とした重商主義的経済政策を前提としたものであり、こうした植民地農業の構想は植民地の気候や環境に対する知識や最新の農法の知識に依拠していた。このように、ペンの植民地構想は

従来指摘されてきたような信教の自由を目的としただけでなく、イデオロギー的にも経済政策的にも当時の政府が推進した植民地政策と親和的なものであった。

これに加えて、3本の書評論文を発表した。第一に、『アメリカ太平洋研究』第19号に発表した、斎藤眞著、古矢旬・久保文明監修『アメリカを探る 自然と作為』の書評論文である。11篇の論文からなる我が国のアメリカ史研究のゴッドファーザーである著者の遺稿集を読み解き、著者が晩年展開したアメリカ史における「自然と作為」について、その意図と枠組みを明らかにした。北米大陸の自然環境や諸植民地の宗教・政治・経済的な多様性をアメリカ史に本来的に存在する「自然」として捉え、それに対する支配や統合のモメントを「作為」としてアメリカ史を貫通する根本的な原理と捉える史観に晩年の著者が到達したと指摘した。『史学雑誌』127編5号に発表した「北アメリカ（2017年の歴史学界-展望-）」では、2017年度に刊行された北米近代史とカナダ史に関する日本人の業績を通覧するとともに、全体の趨勢としてそれぞれの研究に見て取れるアメリカ史記述のグローバル化とその批判的検討について指摘した。『歴史学研究』960号に掲載した「和田光弘『記録と記憶のアメリカ モノが語る近世』」は、近世大西洋世界という時空間から初期アメリカ史を見直すモノグラフの書評である。著者独自の史料論からマテリアル・カルチャーと記憶史を接合し、その方法論に基づいて新史料の分析を行った各章は、帝国という枠組みから従来のコーパスとは異なる史料と方法論を必要とする環境史の分析とも通じるものであった。

学会発表では、2018年12月22日に開催された日本アメリカ史学会第43回例会において、「17、18世紀デラウェア渓谷における植民と環境」と題した報告を行った。「帝国の役割に着目して」という副題が示すように、本報告では北米中部大西洋岸のペンシルヴァニア植民地のデラウェア渓谷地域を事例として、17世紀から18世紀にかけてオランダ、スウェーデン、イングランドへと地域の支配勢力が移行していく中で、それぞれの帝国がポリティカル・エコノミーに基づいて求めた自然資源や植民の目的や土地利用が異なったことが、それぞれの時代において異なる自然環境への態度を生んだことを論じた。とりわけ、1680年代から同地域に大量の移民を送り込んだイングランドのペンシルヴァニア植民地が、それまでの毛皮やタバコのような換金作物ではなく、小麦を中心とする穀物を主な生産品としたことと、生産物の輸出を通じて同地域を当時成立しつつあったイギリス大西洋経済に組み込んだことが、地域の景観の変化に決定的な影響をもたらしたことが結論として強調した。さらに、17世紀末から18世紀の植民地で、新聞や暦といった印刷物を通じて農業改良に関する情報が流通していたことを明らかにした。

2018年12月22日に昭和女子大学文化史学会で行った「歴史と映画」と題する講演では、近世の奴隷貿易において劣悪な環境であったことが知られる奴隷船や米国南部の綿花プランテーションにおいて、黒人奴隷がどのように環境に適応していたかを、綿密な時代考証に基づいて制作されたいくつかの映画における描写を通じて論じた。

2018年4月14日に初期アメリカ学会第76回例会として行われた遠藤泰生編『近代アメリカにおける公共圏と市民』合評会では、「初期アメリカ史研究において公共圏概念は必要か?」と題した報告を行った。初期アメリカ史において公共圏概念がどのようなコンテキストにおいて分析概念として登場したかを後づけつつ、本書の各章で定義されている公共圏の概念について検討を加えた。本書で論じられている公共圏はあくまでアメリカ合衆国というナショナルな空間を前提としており、近世世界の実態としてのローカルな自然環境や大西洋世界という広域から見た場合、公共圏が地理的に包含する範囲について再考する余地があるのではないかと指摘した。

最後に、海外調査で得られた成果について報告する。各年の夏期休暇と春期休暇を利用して、アメリカ合衆国において調査を行なった。ハーバード大学のワイドナー図書館およびホートン稀覯書図書館、フィラデルフィア組合図書館で当該テーマに関する一次史料、二次文献、マイクロフィルムの調査・収集を行った。具体的には、ワイドナー図書館では初期アメリカ環境史についての二次文献を収集し、さらに王立協会や工芸振興協会に関するマイクロフィルムを利用した。(渡米中にマイクロフィルムが利用可能であったため、予定を変更しイギリスではなくアメリカでの調査を行った。)ホートン稀覯書図書館とフィラデルフィア組合図書館では近世イングランド及びアメリカ植民地で出版された植民に関するパンフレットや旅行記等の著作や手稿文書の調査を行なった。これらの調査で得られた成果については、順次論文の形での発表を計画している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

鯉淵秀一「斎藤眞著、古矢旬・久保文明監修『アメリカを探る 自然と作為』」『アメリカ太平洋研究』19号、2019年3月、97-102頁(査読なし)

Shuichi WANIBUCHI, "William Penn's Imperial Landscape: Improvement, Political Economy, and Colonial Agriculture in the Pennsylvania Project" in Andrew R. Murphy and John Smolenski, eds., *The Worlds of William Penn* (New Brunswick: Rutgers University Press, 2019), 378-402(査読なし)

鰐淵秀二「北アメリカ（2017年の歴史学界-展望-）」『史学雑誌』127編5号、2018年6月、394-398頁（査読なし）

鰐淵秀二「和田光弘『記録と記憶のアメリカ モノが語る近世』」『歴史学研究』960号、2017年8月、57-60頁（査読なし）

〔学会発表〕(計3件)

鰐淵秀二「17, 18世紀デラウェア溪谷における植民と環境 帝国の役割に着目して」日本アメリカ史学会第43回例会、2018年12月22日

鰐淵秀二「歴史と映画 アメリカ史とハリウッド映画から考える」昭和女子大学文化史学会、2018年12月15日

鰐淵秀二「初期アメリカ史研究において公共圏概念は必要か？」初期アメリカ学会第76回例会 遠藤泰生編『近代アメリカにおける公共圏と市民』合評会、2018年4月14日

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。